

ようこそ『ぐちり屋』へ

麻婆春雨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想郷の住民は基本は自由奔放、悠々自適である。

そんな者達でも生きていれば不満や文句の一つや二つできるのは当たり前というものだ。

ではその者達はどうやって鬱憤を解消しているのか。

これは人、妖怪、神、仙人：etcが愚痴る場所があったら、の話である。

※原作改悪、独自設定などの恐れがあります。

※男オリ主が登場します。

※作者は文才スキルが0を超えてマイナスの域にいます。

※作者はノーマルさえクリアできない雑魚です。

※弾幕ごっこ？知らない子ですね。

以上が許せる方だけご覧になっていただければと思います。

# 目次

プロローグ	1
とある日のぐちり屋	4
とある日のぐちり屋	10
とある日のぐちり屋	17

## プロローグ

文字通り人間が集まって暮らす人里、その外れのあたりに夕方になると一つの屋台が現れる。

リアカーのような可動式の木製の屋台は見るからに年季が入っており、正面には青い暖簾がかかっている。

『ぐちり屋』

暖簾に書かれた白の4文字。

これは勿論店主が愚痴るという意味ではない。そんなものは店として成立してないと思う。

この屋台は酒やつまみを肴に思う存分愚痴ってもらうために造られた場所である。

そして、この店には店側ではなく客が守らなければならないルールが存在する。

一つ、本人他人関係なく本名を出してはならない。なお、客の愛称は基本店主がつける。

一つ、他人と相席になり、その人の愚痴を聞いたとしても他言してはならない。

一つ、知り合いと鉢合わせしても他人のふりをしないとイケない。なお一緒に来た場合はその限りではない。

そして、一つ、

愚痴ることを遠慮してはいけない。

なお、これらのルールを破ったものには世にも恐ろしい罰ゲームが与えられるそうで…

今日もこの屋台には、日々のストレス、文句、不満、懺悔 e t c :  
色々抱えた者達がやってくる。

「さてさて、今日も今日とて店開き〜」

鼻歌交じりに屋台に暖簾をかける。始めたての頃は青く鮮やかな色を放っていたこの暖簾も今やかなり薄汚れてしまっている。

「そろそろ新調するべきかなあ？」

でも暖簾つてそもそもは汚れた手を拭くものだったらしいし。：まあ、いつか」

一人、思考の迷路に迷い込む前に考えを放棄する。一人でうんうん悩むのは私の趣味ではない。日がな一日のんびりのほほんと暮らすのが一番私の性にあっている。

そこらへんで考えるのを止め、お店の最終確認。

「えーっと、卵に大根、ちくわ、こんにやく、がんも、餅巾着……：うん、おでんの仕込みはオツケー。日本酒も割とあるし鬼とかが来ない限り大丈夫だ。ビールも瓶が10本はあるね。えーっと……後はー」

屋台の下の方を確認するためしやがむ。

戸棚を開けるとそこには5本ほどのジュースの瓶が周りに置かれた氷のおかげでキンキンに冷えている。

「うん、ラムネとかもオツケー。ついでに氷もあるね。昨日氷精ちやんからもらつといてよかったよ」

まあ、真冬だから頼む人はそうそういないだろうけど。

よし、準備は万端だ。いつでも誰でもおこしやすって感じだね。

「おっと。誰か来たかな？」

早速足音が聞こえてきた。

今日のお客様は誰だろうね？

「そーいや、暖簾かける前に店の確認するべきだったなあ。まあ、いつか。」

とある日のぐちり屋　　くR. Hさんの場合く

「こんばんは。やってる?」

「いらっしやい。もちろんやってるよ」

白い息を吐きながら暖簾を腕で押し分け一人の少女が入ってきた。全体的に赤と白。

真つ赤の巫女服と脇の部分がない袖。首元に黄色いリボンとトリードマークなのか頭のやや後ろの方に大きな赤いリボンを身につけている。

ちなみに巫女服と言っても袴とかを身につけているわけではない。普通にスカートに見える。

そしてなぜ脇が開いているのだろうか。真冬だというのにこの格好とは…心頭滅却してもする気にならない。絶対寒いだろう。

結論、私からすると巫女には見えない。

「何ですよ。どう見ても素敵な巫女でしょ」

こいつ、エスパーか…!

本当にこの人の勘は鋭いね。

「何で思考を読めるのかについては聞かないけど…自分で素敵ってつける?」

「別にいいでしょ?」

「うん、いいよ。それより座りなよ」

いつまでも立ち尽くしながら話す巫女に座るように促す。

まあ、私がいちいちつつこんだのが悪いのだけどね。悪いのかな?

まあ、いつか。

「そんで、何にします?」

「じゃあ、熱燭とおでん。大根とこんにやく」

「ん。ちよつと待っててねー」

そう言っつて湯を張った熱燭めいかーにとっくりをつける。

前まではこれを鍋でやっていただけ、この間とあるスキマの妖怪さんにこの熱燭めいかーなるものをいただいたのだ。

本当に文明の利器っていうのは便利だよ。

「じゃ、先に大根とこんにやく渡しとくね。」

そう言ってお皿に大根とこんにやくを載せ、おたまでつゆを多めにかける。

「はい、どうぞ。からは好みで」

「ん」

目の前の巫女さんはぶっきらぼうに言う（目はキラキラしてるので楽しみにしてくれてたのはわかった）はふはふ言いながら食べていく。

と、そこで熱燗ができた。徳利を抜き出し布巾で水滴を取ったあとお猪口と一緒に提供する。

「ほい。熱燗お待ちー。熱いから気をつけてね」

「ありがと」

お猪口にとつくりの中身を注いだ巫女さんはチビチビと口を付けている。

：美味しそうに飲みなさる。

ちよつと欲しくなってきた。

けどがまんがまん。

「んで、今日はどうしたんだい？」

頃合いを見て話しかける。

うちは『ぐちり屋』だ。

ここに来る客はみんな決まって何かしらの愚痴を持っているのである。

「そうそう聞いてよ！」

今日ね！スキマのやつがね！来月から仕送りを減らすとか言い出したのよ！

今でもかつかつの生活してるのにこれ以上減らされたら干からびちゃうわよ！」



「…ふーん。なるほどねえ」

食い気味にまくし立てる巫女さんにほんの少しのけぞりながら相槌。

生命に関わることだからか鬼気迫るものを感じる。

「それでねーなんでそんなことすんのって聞いたらね！

私が最近仕事をサボりすぎてるから、とか言い出したのよ！

もう私カチンと来ちゃってね！

そのまま陰陽玉ぶつけて飛び出してやったのよ！」

「それはまた、暴れたねえ…」

そのスキマさん…熱爛めいかーくれた人とあだ名が似てるなあ。

…ま、気のせいかな？

うん、気のせいだ。

「ねえ、ひどいと思わない!?!」

お酒が回ってきたのか、大きな身振り手振りで愚痴る巫女さん。

私が大根の追加の仕込みをしていると意見を求めてきた。

さて、ここでただ同調するのは簡単だし、無難なのだが…それは私の性に合わないのね。

誰かに嘘をつくなんてめんどくさい真似は嫌いなのです。

良くも悪くもマイペース。

それが私だと思うのです。

「ま、そのスキマさんも巫女さんのことが心配なんだよ。多分ね。」

「むー。あいつの肩持つわけ?」

巫女さんはさつきより不愉快そうになる。まあ、当たり前か。

「いんや、そういうわけじゃないよ。ただ向こうさんも巫女さんもお互い思うところがあるということですよ」

「そんなことないわ!」

あいつは私を弄って面白がつてるだけよ!」

2本目のとっくりを持った左手を机に振り下ろして言う巫女さん。

とっくり壊さないでね?」

「まあ、それもあるのかもしれませんがね。でも巫女さんがスキマさんの心の中で大きな部分を占めてるからこそだと思うのです」

興味もない相手なら弄って遊ぼうとすら思わないはずだしね。

「うう、でも私だって今でもそれなりにお仕事はしてるつもりなのよ。境内の掃除とか妖怪退治とか。」

それでも参拝客は来ないし、お賽銭も増えないし…

それなのにスキマのやつ…」

「…人生山あり谷あり、ってヤツです。誰でもいつもうまくいくわけじゃない。」

スキマさんも多分そんなことは知ってるだろうね。もちろん巫女さんがちゃんと働いているということも。

それでもあまりの心配さ故にそういう厳しいこと言っちゃったのだと思うのよー」

「…それは…」

ちよつと湿っぽくなっちゃった…

れつつしんみりぶれいくだー。

「それに巫女さんも少しサボり気味だったって自分で思ってたんじゃないの?」

「うっ!」

「だからムキになって怒っちゃったんじゃないの?」

「そ、そんなことないわよ!!!」

少しニヤニヤしながら言うとう図星つとばかりに巫女さんは大声をあげる。

おうおういい反応じゃのお。

「まあ、まだ努力の余地ありって感じだねえ。」

お前なんかと言われたくない!

って思われちゃうかもだけど」

そう言っつてニヘラと笑う。

どうも説教っぽくなってしまふのは私の悪い癖かもしれない。

「…全くよ。私はここに説教されに来たんじゃないわ」

そう言っつておちよこの酒を飲み干す巫女さん。

たはは、痛いところつかれたね。

気の利いた言葉の一つでもかけれたらよかつたんだけど…自分不

器用なんで。

「ははは。それもそうだね。」

じゃあ説教ぼくなっちゃったお詫びに卵でもお持ち帰り用に差し上げましょう!」

「え?! いいの!?!」

無料で!?!」

「もちろんだよ。」

これはお詫びなんだから」

目が椎茸みたいな模様になった巫女さん。無料という単語に弱そうだ。

「…あ、酒が切れてるね。お客さん、お代わりしますかい?」

「…いや、いい。ちよつと用事を思い出したわ。」

それにいつまでもこんな説教くさい奴とられないわ」

うーん、辛辣だね。」

でも、そう言い放つ巫女さんはどこか覚悟を決めたような顔をしていた。

ふふふ、若いとはいいもんだねえ。」

「ふふ、言えますねえ。」

そんじゃ、はい。」

お土産の卵ね」

これまたスキマの妖怪さんに貰ったたっぱーと言う容器に二つ、たまごを入れて紙袋で包む。」

その後、熱いから気をつけて、と注意しつつ巫女さんに手渡した。」

「お腹一杯なら誰かと分け合うのも乙なものだよ」

「…ありがとう」

「ん、どういたしまして。」

あ、お勘定は?」

「ツケで」

「えー、また?」

「じゃ、バイバイ」

そそくさと巫女さんは飛んでいった。ちやつかりお土産を携えて。」

「あーあ、また代金もらえなかった」

まさかツケを払わなくてもいいものと認識したりしてないよね!?  
もしそうなら怖いわあ。

最近の子怖いわあ。

……

まあ、今日はいいい愚痴が聞けたし良しとしますか。  
仲直りも出来てるといいんだけど…

まあ、出来てなかったらまた愚痴りにおいで。

そんなくさいことを思いながら私は屋台をしまい寝床へと向かった。

おまけ ( ^ ω ^ )

後日、店の品物の補充のために人里のお店で買い物していると、  
違うお店でお手伝いらしきことをしている巫女さんを発見した。

作業が終わるとその店の店主さんが巫女さんに頭を下げてお礼を  
していた。巫女さんは照れくさそうに頭を掻いてた。

和んだ。

スキマさんとどんな話をしたのか少し気になったのは別のお話。

とある日のぐちり屋　　くM・Iさんの場合く

今日も私は屋台を運びいつもの場所に陣取っている。

極寒の冬は過ぎ去り、雪が降らなくなつたのを少し寂しく感じてる今日この頃。

しかし、未だに肌寒くあったかい食べ物飲み物が手放せない。

そんな訳でおでんの仕込みの予備の準備をしておく。

備えあれば憂いなし。

用心深いことに越したことはないと思うわけなのです。

「お、誰か来たかな？」

ザツザツ、と地面を踏みしめる音が聞こえた。心なしか足取りが重い感じがする。

「はあ、こんばんは……」

「あ、千里<sup>せんり</sup>さん、いらっしやい。お疲れみたいだね」

暖簾を頭にかけてながらため息混じりに入ってきたのは一匹の妖怪。

白い装束を身につけており全体的に黒いスカート(?)は裾の方が赤くなっている。背中に一振りの太刀を背負い片手には紅葉が描かれた盾。

何より目を引くのは頭頂部の山伏風の防止の横にいらっしやる犬耳と臀部にある尻尾。

めっちゃもふもふしてそう。

触ってみたいとか思ったり思わなかったり。

嘘つきました、思ったりしてます。

「今日も仕事が大変でしたから……」

「あはは……ま、まあ座りなよ」

魂が抜けそうになつているお客さんに引きつった笑いしか浮かべられないが取り敢えず着席を促す。

「何にする?」

「……じゃあ、熱燗とがんどきお願いします。……もう今日は飲みます！」

飲まないとやってられません!!」

「あいよー。でも明日の仕事に差し支えないようにね？」

「ふふふ、明日は珍しく休暇をいただいたのです！」

「だから心配ご無用です」

「なるほどー。じゃあ、思う存分ゆっくりしていきなー」

興奮気味に言う千里さん。

興奮したからか耳はぴーんと立っており、尻尾はブンブン揺れている。

…もふりたい。

「はい、じゃあがんもどきね。熱爛はもう少し待っててね」

「ありがとうございます」

「で、今日はどうしたんだい？」

お酒を温めながら聞く。

すると、千里さんはがんもどきを噛み切ると口を開いた。

「今日は特に仕事が大変だったんですよ。主にクソ上司のせいで」

「おやおや手厳しいね」

「私の仕事が妖怪の山の哨戒だったことは店主さんも知ってますよね？」

「もちろん。常連さんだもの」

言い忘れてたけど、千里さんはここの常連と言えるほど通つてもらっている。それだけ気苦労が多いのだ。

「私たち白狼天狗の仕事は主にそれなんですけど、ただ見回るだけじゃ済まないんです」

「どうとっ…」

熱爛ができるのを待ちながら相槌をうつ。

「今日の朝早くなのですけど、木っ端妖怪たちが天狗の縄張りで小競り合いを始めたみたいで」

「ふむふむ」

「能力故にそれをいち早く発見した私が沈静しに行かなければならなくなってしまうって…」

「それは運がなかったねえ。はい熱爛、熱いから気をつけてね」

「あ、ありがとうございます」

とつくりとお猪口を受け取った千里さんは自分で酌しながら話を再開した。

「まあ、その妖怪たちはそこまで強くなかったので、すぐに無力化できましたんですが、その後いつものように哨戒に戻ると、クソ上司に絡まれましたね」

「一難去って、って奴だね」

「全く、その通りですよ！」

千里さん曰く、そのクソ上司さんは新聞作りが趣味なのだが、記事のネタがなく、やれじゃあ千里眼使ってネタ見つけろ、やれ「ネタが無いなら、記事にできるような面白いことしろ」なんて絡んできたらしい。

それも双方共にお仕事中に。

「そいつは…面倒だったね」

「全くです！」

しかもその後、クソ上司のサボりを叱りに来たお偉いさんがついでとばかりに私にまで文句を言ってきたのですから！

「なにそれ、理不尽すぎる」

「極め付けは夕方頃のことです。」

すごい剣幕した白黒の魔法使いが突然天狗の縄張りに飛び込んできたので、止めようとしたら極太のレーザーぶっ放されたんです!!!

「うっわあ、それは…」

なんたる災難だ。考えるだけで寒気がするね。

「しかも、その理由が！」

クソ上司にパンチラを撮られたからって！

もう、我慢なりません！

ガルルルル!!!」

「お、落ち着いて!?!」

深呼吸深呼吸！」

髪の毛を逆立てて狼のように（事実狼の妖怪だが）唸りだした千里さん。

柄にもなく焦ってしまった。

屋台を壊されたらたまらない。

「はっ！す、すいません！」

「お、落ち着いてくれたならだいじょぶ」

ど、どうやら正気に戻ってくれたらしい。本人もご乱心だったことに気付いたようで何度も頭を下げてきた。

そこで、気にしていないことを伝えるべく親指を立てて突き出す。

なお一応平静を装ってはいるが内心冷や汗たらたらである。

「お酒きれちやってますけど、お代わりどうします？」

「あ、…もらいます」

「熱燗？」

「は、はい。」

「あいよー。ちよいと待っててね」

そう言って2本目の徳利を取り出してその中へ酒を注ぐ。そして熱燗めいかにぎぶんと。

「あ、お皿も空だね。何かいるかい？」

「じゃあ、牛スジと大根を」

「りよーかーい」

ダシが染み込んでいそうな牛スジと大根を選び落とさないように皿に乗せる。仕上げにだしを少しかけて完成。

「へいおまちー」

「どうもです…はあ」

千里さんはため息まじりに皿を受け取った。もう色々溜まっていらつしやるのだろう（別に破廉恥な意味は無いよ）。

もしくはキレかけてしまったことを反省し、落ち込んでいるのかもしれない。

おでんに対してため息をつかれたのでは無い…と信じたい。

うーん。そんな表情されながらだどこちらも気分が憂鬱としてくる。

どうにかできないものか…

………



「でも、天狗さんってすごいよね」

突然呟いてみる。

「へ?…何がですか?」

案の定、戸惑う千里さん。

「そりやもちろん、妖怪の山を支配するだけの力があるって所が」

「うーん、それはまあ。でも天狗は生まれながらに速さがダントツですからそんなにすごいことでもないですよ」

特に私なんか全然凄くないし、とお猪口を弄りながら千里さんは続けた。やつぱりさつきから落ち込み気味だ。

あまりよろしくないね。

「いや、私が褒めてるのは強固な組織を作ったってところだよ」

「そう…ですか?」

「うん。」

元来、妖怪つてのは勝手な生き物だ。集団で動くことはほとんど無い、というか我が強すぎて集団行動なんてできないんだよ、普通はね」  
実際妖怪なんて原動力が何かしらの欲望なのだから仕方のない話なのだが。

「ところで、そういった組織の要ってなんだと思う?」

「長おぢじゃないですか?」

千里さんは当たり前前というように即答。ついでにからしを乗せた大根を細かく切って口に運ぶ。

確かに長は大事だ、というより必須だ。だが、要だとは思わない。

「そう言えば、千里さんって将棋好きだったよね?」

「えっ?…好きですけど、何か?」

「一番よく触る駒って何?」

「それは…歩ですかね。けどそれが何か?」

私が急に話を逸らすものだから、不審がられてしまったかも。  
安心してください、本題入りますので。

「私は天狗の組織も一緒だと思う。真に組織を支えているのは千里さんのような下っ端だと思うんだ。言い方は悪いけどね」

「!」

千里さんはうつむきながらだが僅かに肩を跳ねさせた。

「確かに、歩は行動範囲は狭いしはつきり言つて弱い。でも他の駒を身を挺して守つたり、敵の逃げ道を潰したりして勝利に必ず貢献してる。」

実際、駒落ちでも歩が落ちることはない。それは歩全てが無くなつてしまえば、はつきり言つて勝負にならないからだと思う。

「千里さんも一緒。烏天狗に比べれば弱い、けど小回りの効く性質と圧倒的な物量で確実に天狗社会を支えてる。いなくなつてしまえば天狗の組織は回らない。まさに縁の下の力持ちと言える。」

だからね、千里さんは私から見たら結構凄い妖怪なんだよ？

だから、もっと自信持つて？」

「……………」

「……………」

「……………」

あ、あれ、おかしいな？

うつむいたまま反応なし？

おだてて機嫌直そうぜ作戦、うまく決まっただと思っただけけど…

あ、あれか、下っ端つて言つたから怒つてるのか？

「いや、別に下っ端つて言つたのは悪気があつたわけじゃなくて！

ああ、あの、謝りますごめん！

調子乗つてました！ごめんなさい！

ああ、あわわわわ…」

「…くすっ」

「うえっ？」

小さく吹き出すような音が聞こえた。

おそろおそろ顔を覗き込んでみると…

「怒つてませんよ、店主さん。」

微笑んでいらつしやつた。

よかった、機嫌を損ねてなくて。

「むしろありがとうございますございます」

「…どういたしまして」

どうやら作戦は成功していたみたいだ。

「そんじや、気も軽くなったところで、今日は存分に愚痴っていつてよ。夜はまだこれからだからね」

これだけ鬱憤が溜まるなんてこと私には無い。千里さんがどれだけしんどい思いをしているかなんて本当にはわからない。

けど、せつかく愚痴りに来てもらったんだ。今日はゆっくりじっくり愚痴ってさっぱりしていつてほしいな。

そんなくさいことを考えながら、私はお酒のお代わりの用意を始めた。

おまけ ( ^ ω ^ )

その後、上機嫌で飲み過ぎた千里さんは酔いつぶれてしまって、屋台で夜を過ごすことになった。

そのせいで私は寢床に戻れず朝まで起きっぱなしだった。

翌朝、目が覚めた千里さんは何度も何度も謝ってきたが、その時尻尾と耳がへによんと垂れ下がっていた。

和んだ。

お詫びさせて欲しい、と強く言われたので尻尾をもふもふさせてもらうことになった。

…

…

…

ああ、心がもふもふするんじやあ、

とある日のぐちり屋　　くY. Yさんの場合く

肌寒い季節は過ぎ、桃色の花びらが舞い散る季節すら通り越し、心地よい暖かさからうだるような暑さに鞍替えしようとする頃。一言で言うなら初夏かな。

「よっっいしょーっ」と

いつもの場所へ屋台をひいてきた私は早速暖簾をかける。

以前は新調することも考えていたが結局することなく今に至る。

これだけ使っているとどうしても愛着というものが湧いてきてしまふのだ。

結局、ギリギリまで使つてあげようという結論に落ち着いた。

「んー。それにしても空が赤いなあ。…誰の仕業かな」

誰にともなく呟いてみる。

そう、なぜか今日は朝から空が赤いのだ。まるでいちご味のしろっぷをぶちまけたようなのだ。

なにそれ美味しそう。

昼頃に人里に向かってみれば、人通りがほとんどなかった。たまたま見つけた寺子屋の先生に聞いてみたところ、どうやら赤い空は赤い霧の発生が原因であるらしい。そしてそれは人体には悪影響（気分が悪くなる程度だが）を及ぼし、低級妖怪などでは妖気にあてられて暴れやすくなってしまうとのこと。

まあ、人外の私には悪影響はない。

特に興奮することもないので私は低級妖怪ではないみたいだ。

そんなこんなで今に至る。

ほとんどの店が閉まっていて、食材を買うことはできず在庫が少し心許ないが、こんな天気じゃお客様も来ないかもしれない。

多分大丈夫だろう。

「それにしても空がこんなのだと時刻がわからないなあ」  
朝からずーっと赤い空。

唯一変わったことと言えば真つ赤な月が上がったということだけ。  
それまで霧のせいで太陽が現れることはなかったのにね。

不思議だね。

「奇妙な天気だねえ」

「本当ね」

「その通りだね…ん？」

空を眺めながらつぶやいたところで客席の方から突然の相槌。思  
わず会話を続けてしまった。

「いらつしやい。でもびつくりするからさ、暖簾から普通に入っ  
てよ」

「神出鬼没が私の売りなの」

「突然現れる人って幻想郷ならそんなに珍しくもないけどね」

「それでもあなたは驚いたでしょう？」

「…まあね」

私程度では口で勝つことはまず不可能なお客さんがそこにいた。

真つ白な肌に長く艶やかな金髪、ナイトキャップのような帽子に紫  
色のドレスを纏う掛け値無し的美女。しかし扇子で隠す口元から溢  
れる笑みは何となく妖しげな雰囲気醸し出している。

幻想郷で、特にそれなりの力を持つ者なら人妖問わず知らない者は  
いないだろう。まさに妖怪の賢者の名にふさわしい少女。

先程は口では勝てないと言ったが、もちろん単純な力でも私など足  
元に及ぶべくもないだろう。

「まあ、そんなに褒められたら照れちゃうわ。しかも少女なんて…！」

「ナチュラルに思考読まないでよ」

やはり規格外だ。色々。

「そんじゃ、何にする？」

今のオススメは糠漬<sup>ぬかづけ</sup>だけど」

「なら、それを頂くわ。それと熱燗もね」

「あいよー」

例のごとく、とつくりを熱爛めいかにつけた後、下の方の戸棚から漬物の甕かめを取り出し、甕の中からきゅうりとなすを取り出す。その両者ともに糠がこべりついているので、流水で洗う。

それにしてもこのたんと言う入れ物は本当に便利だ。蛇口をひねるだけで好きな量だけ水を出すことができる。流石は河童の技術である。

閑話休題。

糠を洗い落としたきゅうりとなすを

やや斜め向きに輪切りにする。後は皿に盛り付けて完成である。

「はい、漬物と熱爛おまちー」

「ありがとう」

優雅にお礼を言ったお客さんはポリッと小気味のいい音を立てきゅうりの糠漬を咀嚼し、嚥下した。

「うん、なかなかいい塩梅ね。うちの式のとタメを張れるんじゃないかしら?」

「お褒め頂き光栄だね。けどスキマさんのところの式さんと比べられるのは流石に荷が重いよ」

「ふーん、謙虚なのね」

「いや事実だよ。それに大きい口叩いて恥かくのも嫌だし」

「あら、そう」

一つの話題が終わったところでスキマさんはお猪口に口をつける。

こういふ何気ない仕草さえ気品を感じさせるのだから流石だと思う。

「そう言えばこの間はありがとう、素敵な巫女さんのこと」

「この間…」

思い出したようにスキマさんは切りだした。

「この前、というと真冬の巫女さんの喧嘩のことだろうか。」

「…さて何のことかな」

「仲直りするように仕向けてくれたのでしょう?」

「…私はただお土産あげただけだよ」

「素直じゃないわね」

「事実だよー」

「なら、そういうことにはしておいてあげるわ」

どこか苦笑交じりに、ついでに恩着せがましくそう言うスキマさん。なんだか微笑ましいものを見るような生暖かい目を向けられた気がする。

私は別に嘘などついていない。

別に、そんな風にお礼を言われるのが照れ臭いとかそんなことではない。断じてない。…うん。

「それで今日はどうしたの？少し疲れてるみたいだけど」

取り敢えず尋ねてみる。ここに来たってことは何かしら腹に一物抱えているはずだから。

話題を変えたかったわけではない。断じて…うん。

「そう見えるかしら？」

「まあね」

疲れてるように見えるのは本当のことだ。目の下には隈があるよ。うだし、いつもに比べて覇気がない。

「…そうね、確かにここのところ緊張を解く機会がなかったから」

机上に両肘を寄せ、組んだ手の甲で顎を支えるとスキマさんは話し始めた。

「何か大きな仕事でもあったのかい？」

「ええ、それはもう」

「もしかしてだけど、この空、いや、霧のことに関係がある？」

「…ご名答。今日は鋭いのね」

「私はそんなに鈍<sup>にぶ</sup>ちんじゃないよ」

なんだか馬鹿にされた気がする。取り敢えず抗議だけは申し立てておこう。

「確か以前話したわよね？」

「スペルカードルールのこと」

「ん？」

少し前に聞いた覚えがある。

確か勝ち負けを殺し合いでなく、弾幕での戦いで決めるみたいな感

じだったかな。

でも妖怪たち、特に天狗たちには受けが悪く広めることがまだできていなかったはず。

「えーつと…幻想郷中に広めたいって言ってたやつ？」

「そうそれ」

私が覚えていたことで気分を良くしたのか、スキマさんはお猪口のお酒を一気に呷り満足気な表情を浮かべた。

「そのことと霧、何の関係があるんだい？」

まさかこの霧に弾幕ごっこをしたくなるような成分があるとか？

…いや、ないか。これ一応人には有毒だったし。

そんな風に考えているとスキマさんが真面目な表情をし口を開いた。

「関係はあるわ。実はね……………」

…

……

……………

「なるほどねえ」

スキマさん曰く、今回の異変では首謀者に対して暴力による駆除ではなく比較的安全な決闘、すべるかーどるーるに則った退治を求めたということだ。

確かにそれなら死者は激減する上に解決にあたる巫女も安全だ。

また幻想郷での絶対の規則、「妖怪は人を襲い、人間は妖怪を退治する」という仕組みは失われない。

そして見事異変を解決した暁にはすべるかーどるーるを軽視していた者たちも認めざるを得なくなる。

「否定的だった天狗たちも従わざるを得ないということだね」

「ええ。特に天魔の奴は鼻で笑って突っぱねてきたのだから…あいつの悔し顔が眼に浮かぶようだよ」

してやったりと言う顔をするスキマさん。ちなみに天魔というのは天狗の頂点だ。

しかし疑問点はある。



「でもそうすると、異変を起こす妖怪が増えるんじゃない？」

死の可能性が減れば考え無しに異変を起こす奴が増えるということだ。

「それは好都合よ。その分あの子は働かざるを得ないし、そうすればより強くなってくれるわ」

「ひゃー、すばるたってやつだね」

「獅子は子を千尋の谷に落とすのよ」

どうやらそこんところも想定済み、むしろ利用しようとさえしている。やはり賢者様には考えが及ばない。

「それで今回の首謀者は？」

「吸血鬼よ」

「…そんなのいたっけ？」

もちろん知識としては知っている。だが幻想入りしたなんて話は聞いてない。

「いえ、外から幻想郷に移りたいとのことだったから、利用させてもらったわ」

「相手はよく話を呑んでくれたね。退治される事が前提の八百長なのに」

「そこはほら、話し合いで穏便に…ね？」

何故だろう。「話し合い」の後に（物理）が付いてた気がする。

「へえ、それはまた大胆な。」

吸血鬼って言わずと知れた大妖怪じゃない」

吸血鬼。

多くの弱点はあれど鬼の如き力に天狗に並ぶ速さを誇る西洋の大妖怪。

そんなのを相手取るとか私には考えられないね。

「ええ、そうね。とつても骨が折れたわ」

「そっか、それはお疲れ様。じゃあ、今は立場を忘れてのんびり愚痴っ  
ていってよ」

「ふふふ。じゃ、お言葉に甘えようかしら」

そこからはのんびりと愚痴が始まった。友人に茶菓子を奪われた

こと、吸血鬼にぐんぐになるという槍を投げつけられ傘がオシヤカになつたこと、バ〇アげほんげほん：やや大人びたご婦人呼ばわりした白黒の魔法使いをスキマに閉じ込めたこと、中には巫女さんが可愛すぎてつらいといった愚痴のろけもあつたりした。

この幻想郷をこの妖怪ひとほど愛し、尽くしているものはいない。それは幻想郷の母としてか、それとも恋人としてか。私には推し量ることできない。

それだけ大きな存在が私の前で愚痴をこぼしている。

特別に頼られているわけではないのだが、それでも少し誇らしく感じてしまう。

そんな微かな高揚を感じながら私は目の前の話に相槌を打つのだった。

おまけ（　ゝ　ω　ゝ　）

後日、魔女さんが愚痴りに来た。

いろいろ話すうちに例のスキマさんのお仕置きの話になった。

最初は文句を言いまくる魔女さんだったが途中から泣き出してしまい少しびっくり。

どれだけ怖い目にあつたのか、少し興味が湧いてしまったが同時に知るべきではないと思つた。

知つてしまえばもう逃げ場は無くなるのだ。

知らぬが花という言葉に従つておこらう。

そのとき頭に響いた「それでいいのよ」という誰かの声は聞こえなかったことにした。

くわばらくわばら。